

反応に関する一考察

林 隆 也

朝日大学 法学部

Über Reaktionen On Reactions

HAYASHI Takaya

School of Law, Asahi University

Zusammenfassung

Das Seiende ist. Es ist einzigartig und ganzheitlich. Menschliche Gedanken sind sogar überhaupt grundlos. Es gibt weder Gründe noch Folgen in der Natur. Menschen bilden sie. Die Bedeutung des Seins ist das Seiende. Das Materialistische ist auf der Erde. Es ist einzigartig und ganzheitlich. Es ändert sich immer. Wir können es nicht ergreifen. Reaktionen zeigen Änderungen der Materialistischen. Reaktionen ereignen sich gegeneinander. Es gibt weder Anfänge noch Enden. Menschen bestimmen sie willkürlich. Zahlen und Objektivität schneiden die Wirklichkeit der Natur ab. Sie bieten uns nur Fehler oder Toleranzen. Wir können Fehlerhaftigkeit nicht vermeiden. Sie ereignen sich aus der Einzigartigkeit und der Ganzheitlichkeit der Materialistischen. Das Lebendige hat Schichtungen der Reaktionen. Die Reaktionen haben viele Schichten. Diese können die Aktivität der Lebendigen aktivieren. Die Aktivität wirken mit dem ganzen Körper. Es handelt sich um die Einzigartigkeit und die Ganzheitlichkeit. Der Mensch hat die Denkkraft. Er denkt einzigartig und ganzheitlich. Es gibt weder Gefühle noch Seele. Menschen bilden sie mit der Denkkraft. Der Mensch ist. Sum ergo cogito. Das Gehirn wirkt nicht allein. Die Denkkraft hat auch viele Schichten. Sie wirkt einzigartig und ganzheitlich fürs Leben. Es handelt sich um die Befreiung des Wissens. Und wir gehen nach dem neuen Gebiet der Philosophie.

1 物質的なもの

存在するものが (das Seiende)、存在する。そして、それは、唯一であり、全体的なものである。

我々がこれまで考察してきたものは、この程度のものである。しかも、結局のところは、如何なる根拠もない、というのは、我々自身を含めて総ての思考に妥当する。根拠も「客観性」もまた、従来の考え方の重要な要素であったが、それすらも、我々は容易に乗り越えている。自己矛盾で悩む必要は、もはや、ない(1)。

存在するものが、総てである。さらに、存在するものに、何らの区別もない。存在するものは、単に存在するだけである。そこに意味や目的を付け足しているのは、人間の恣意的な想像力である。もし存在の「意味」を語るとすれば、それは、存在すること、である。存在するものとしての自然の現象は、数学も法則も必要としない。同様に、人間の言語も、文法を必要とはしない。法則がなければ自然現象は起き得ない、と考えることは、文法がなければ言語は成立しない、と考えることと全く同様である。いずれも、現実の反対のことを語っている。そして、このような考え方こそが、「常識」であると考えられている。しかし、常識が常に「正しい」訳ではない。存在するものは、唯一的、全体的なものとして存在し、前後関係、相互関係は、何もない。そのような関係付けは、人間が登場して初めて、行われる。

存在するものがなければ、考えることも出来ない。このことを確認するだけでも、「知識の解放」は始まっている(2)。人間が出現し、考えることを始める前には、誰も、何も考えることはなかった。人間どころか、地球や太陽が現れる以前には、60億年でも、70億年以前でも良いが、誰も考えるものはいなかったのである。いたとすれば、それこそが「宇宙人」であり、地球外の知的生命体であろう。そのようなことは、SF小説や映画での話である。空想であり、無根拠であることは、哲学も、小説や映画と同様ではあるが、哲学は、ひたすら現実を眺めようと、小説や映画は空想の世界を自由自在に駆け巡る点で異なっている。それ故、哲学より、小説や映画の方が遥かに楽しく、多くの人々を引き付けるということは、当然である。プラトンのアイデアが魅力的であるのは、空想の豊かさにある。しかし、それは現実ではない。いずれにせよ、この地球上に人間というものが出現し、考えることを始めなければ、誰も、何も考えることはなかったのである。デカルトのコギト (cogito) とスム (sum) の順序が逆であった。

地球が誕生してから46億年として、この地球上に存在するものは、常に唯一のものとして、存在して来た。それは、全宇宙の存在するものと同様である。我々の目の前の小石もまた、同様に、唯一の存在するものとして存在し、ここに小石が存在する、ということが、現時点での我々が目にする現実である。そして、「小石がある」と言うのである(3)。しかし、その小石は、46億年前の地球上での出来事と全く同様に、常に変化し、我々が見ている小石は、既に、つい

さっきの小石とは、別ものである。その微妙な変化を捉え切れただけのことで、唯一なものとしての存在するものは、常にそのような状態に、ある(3)。

物質的なもの (das Materialistische) が、とりあえず、地球上での存在するものである。この物質的なものも、もちろん、唯一であり、全体的である。そして、瞬時にその姿を変化させて来た。我々は、46億年の変化の現在の変化を、眼前にしている。その状態は、地表も、地中も一定ではなく、常に変化し、同じ状態であることは、不可能である(4)。このことは、地球の表面だけではなく、当然、全宇宙で起きていることである。

この変化しつつある状態が、そもそもの常態である。これを停止して、捉えることが出来ないのは、明白である。我々が、通常、物として手にしているものは、そのようなものであり、「常識」としては、何ら変わりもしない物質、物体、ということになる。しかし、数マイクロメートル単位の精度で作られた部品も、完成した時点で、既に計測された精度ではなく、その部品の表面や内部からの変化が起こり、瞬時に生じる微妙な誤差は、いずれは故障の原因ともなり得るのである。30年や40年も経過した自動車、列車、飛行機、原子力発電所が故障するのは、物質のそのような性質に依る。精密であればあるほど、その変化に依る誤差の影響は、短時間で生じることになる。それは、避けられないことなのである。そして、その物質の変化を捉え切れないということは、単に人間の知覚、触覚等々の問題だけであり、物質自体の問題ではない。物質は、瞬時であろうが、40年であろうが、時間の「長さ」とは関わりなく、変化し続けている。「同じもの」は、存在しない。

そのような物質を通常、「正確に」重さを量り、体積を計算する。しかし、瞬時に変化しつつある物質の重さを「正確に」量ることは、ほとんど不可能である。我々が知っている重さは、その時点での大まかな重さでしかない。そして、我々が知っている「正確さ」は、大抵の場合、何らかの誤差の範囲内でのことである。その誤差の幅は、その都度の物体の精密度の要求によって、様々に変化する。非常に細かいものから、大雑把な測定でも問題ない場合まで、その必要状況に依っている。これもアナログ式から、デジタル式になり、飛躍的に向上したはずである。これもまた、同様に、人間の測定能力の幅の問題である。この精度が高くなっていくと、我々は、技術が進歩した、と理解している。しかし、誤差がある、ということは、どのような場合でも変わりはない。もちろん、逆に考えると、この誤差の範囲内で、パソコンを作り、ロケットを飛ばす、ということは、すばらしい技術の発展であると言えよう。これも、しかし、パソコンは突然、動かなくなり、ロケットの打ち上げの失敗は、残念ながら避けることが出来ない。

この物質的なものの変化を、ここでは、反応 (Reaktion) と考えておく。Re- が付くのは問題ではあるが、とりあえず、反応としておく。

宇宙全体での総ての物質的なものは、単独で存在する訳ではなく、常に他の存在するものとの反応によって、常時、変化する。これもまた、全体的なものであり、部分的なものはない(5)。

時間と空間もまた、全体的である(6)ことから、常時、変化しつつあることが常態であり、固定した状態を捉えることは不可能である。さらに確認すべきことは、「始まり」と「終わり」の「概念」もまた、宇宙全体はもちろんのこと、地球上に限っての出来事であっても、そのような概念はない、ということである(7)。始まりがあって、終わりがある、というのは、実に分かり易いことではあるが、残念ながら、そのような「時点」「空間」を決定することは出来ず、人間が、とりあえずの始まりと終わりを考えているに過ぎない。中間地点にいる者は、起点と終点を知らなければ、自分が中間に居ることも分からない。そもそも、中間の意味が分からないのである。

太陽の推定年齢が46億年、47億年として、しかし、どのような状態になった時に太陽になったのか、正確に決定することは不可能である。宇宙の「始まり」を考えることは非常に楽しいことではあるが、宇宙に「始まり」があり、「終わり」がある、ということこそ、人間の空想である。時間が「流れている」ということも、この空想に基づいている。我々は、全体としての時間を明確には把握していない。仮に始まりと終わりがあるとしても、決定することは残念ながら出来ない。それこそが、我々が考察している、物質的なものの根本的な性質である。そして、この「時間的な」変化を、物質的なものの反応として捉えるのである。

注意すべきことは、「反応」という言葉で、能動的、受動的、ということは、全く考えない、ということである。宇宙全体での全体的な反応では、能動も受動もなく、総てが全体的なものとして互いに反応する。反応自体が変化であり、それが存在するものの常態であり、我々は、捉え切れない変化を目前にしながらか、それには気が付かず、目の前の物体を子細に観察しているのである。このことは、数十年で朽ちてしまうであろう木の机の板でも妥当し、遙か彼方の恒星でも妥当し、全宇宙の総ての存在するものにおいて妥当するのである(8)。

物質的なものの変化は、反応であり、反応しつつある物質的なものである。これが存在するものである。この事態にありながら、人間は、目の前の赤いリングは1個の赤いリングである、と考えて来た。そして、2個目の赤いリングをその横に置き、赤いリングが2個ある、と語っているのである。

さらに、これこそ、繰り返しの蛇足であるが、自然科学の実験、観測について補足しておく。

自然科学では、実験、観察に依る資料が客観性を持つ。しかし、その観察したものは、既に起きたことであり、二度と「同じこと」は起きない。類似の出来事が生じるだけであり、同一ではない。実験データを取り、一次関数的に直線的な傾向が見られたとしよう。ばらけたデータの一番、ありそうな部分に直線を引く。しかし、それは、単なる「傾向」を作り出しているだけであり、自然の現実の現象とはかけ離れている。得られた数値はばらけており、当然のことながら、現実の出来事は、ばらばらの単体の出来事でしかない。しかし、それでは何の意味もないので、とりあえず、直線的に意味を作り出す。これを次に、現実の「今後の」出来事

に当てはめれば、再度、ばらばらの出来事の集まりで、そこに無理矢理、直線の傾向を当てはめているに過ぎない。とりわけ、人間の能力は、直線的に伸びる、ということはほとんどなく、ある日、突然、出来るようになる、ということがある。にもかかわらず、直線的な傾向を当てはめ、その無理矢理の傾向から外れていることを理由に、実に多くの「病気」を作り出している。このようなことは、小さな出来事から、宇宙論まで、ほとんど総ての自然科学的考察に妥当する。客観性の根拠は、反復のない過去の過ぎ去った出来事であり、客観性に基づく予測は、決して知ることが出来ない未来の単なる見通しに過ぎない(9)。そのような事柄が、あたかも「本当で」あるかのように喧伝し、世界中の人々を混乱させることは、科学とは程遠く、単なる政治的情報操作の哀れな使い走りに過ぎない。

数字は、「事実」を語っているように思われがちであるが、実は全くの虚構である。宇宙の存在するものには、数の概念がない(10)。自然科学者が、客観的に考察しようとして、数字に置き換えたとたん、考察対象を見失っている。数の概念は、この対象とのずれが避けられず、この「ずれ」に気が付かないまま「客観性」を語っている。それ故、数の概念に依って表現された現象は、存在しつつある自然の現象ではあり得ない。このことは、小学生の夏休みの自然観察から、高度な理論物理学に至るまで、人間のほとんど総ての思考に妥当する。このことを踏まえて、次の一步を踏み出す必要がある。

2 生物的なもの

物質的なものから、次に、生物的なもの (das Lebendige) を検討する。

ここには大きな飛躍があり、我々は、ほとんど何も知らない状態である(11)。しかし、生物的なものもまた、物質で出来ていることは間違いはない。ウイルスのように、生物と物質の区別は曖昧なままであるが、これもまた、区別しようとする側の都合であり、生物的なものと物質的なものとして何らの区別もない、というのは、これまでの議論から言っても当然である。ウイルスが物質であるのか、生物であるのかは、ウイルス自体には関係のないことである。しかし、ウイルス (と考えられるもの) が存在している、ということは確かである。そして、ウイルスもまた、唯一で全体的な存在するものとして、一つ一つが別ものとして存在する。

それ故、物質的なものの反応は、そのまま、生物的なものでも通用する、と言えそうである。現実には、生物的なものでの反応は、物質的なものの反応と、何ら変わりはない。反応は反応である。問題は、物質的なものが、どのように生物的なものになるのか、という、先の飛躍であり、この点については、全く不明である。

そもそも、物質的なものが、「時間」の幅で言えば、数千年、数万年をかけて、生物的なものへと次第に変化して行くとすると、それを実験室で再現することは、ほとんど不可能であ

る。瞬間にコアセルベートのようなものが生じた、と考えることは、何事かの始まりを前提としている。一点の始まりの概念が間違いであることは、先に指摘したが、生命の誕生という「始まり」を決定することもまた困難である。

当然のことながら、宇宙の何処かから生物的なものが地球にやって来た、としても、生物的なものの発生については、何も語っていない。地球の外で、物質的なものが、生物的なものへと変化したとしても、我々にとっての不明の飛躍は、何も説明はしていない。

この飛躍が不明であっても、しかし、先ほどから述べているように、物質的なものの反応と、生物的なものの反応は、同様のものである。いずれも、この地球上の物質から成っており、それ以外の物質が宇宙にあるとしても、地球上の出来事としては、とりあえず関係がない。それ故、地球上での出来事としては、物質的なものの反応と、生物的なものの反応とが、同様であると考えても良いであろう。実際に、「自然科学的な」考察では、生物を物質的に扱い、実験を行うことが一般的である。そして、数値化した結果こそが「客観的」と考えられている。しかし、残念ながら、これまでのところ、その客観的な自然科学の手法を用いても、生物的なものへの飛躍は、全く分かっていない。我々の視点からすれば、部分的なものへと分解すればするほど、生物的なものから遠ざかっているのである。それ故、細胞から、DNAの塩基配列へと行き着いても、我々は、生物自体の理解について、理解することは困難であり、実は逆方向に、なおさら遠ざかっているのである。

そこで、我々の唯一性、全体性の観点からすると、生物的なものの反応は、物質的なものの反応より、更に重層化 (Schichtungen) している、と考えられる。しかも、これは決して部分、部分では生じない。常に、唯一で全体的なものとして、物質的なものと同様の反応が重層化して生じる⁽¹²⁾。つまり、生物的なもの、個体として確認することが可能であれば、それは生物であるが、その生物は、全体として反応し、動作があるとすれば、その動作自体が全体としての反応である。そして、この全体としての反応が、生物としての重層化した反応である。動作の複雑さは、反応の層 (Schichten) の違いに依る。

それ故、動物の場合を考えれば、非常に速く走ることが出来るチーターもいれば、それほど速くは走ることが出来ないチーターもいるということは、それぞれ、全体としての反応の層が異なり、個体差が生じることは、むしろ当然のことなのである。獲物を追いかけて、仕留める、という動作が、全体としての反応である。チーターは、その都度、唯一の存在するものとして、その都度の反応としての狩りを行う。同じ行為はあり得ない。

このことは、実際に見ることは容易ではないチーターでなくとも、カタツムリやアマガエルの動作を観察しても、全く同様である。カタツムリやアマガエルの餌の好みは、体全体としての反応に依っている⁽¹³⁾。カタツムリが、キャベツの葉を食べるのか、キュウリの中身だけを食べるのかは、カタツムリのその都度の全体的な反応に依って決定され、実に「選択的な」好み

で食生活を行う。アマガエルの場合は、遥かに動作が大きいため、「好きな」餌の場合は即座に飛びついて来るが、「嫌いな」餌の場合は、目の前に持って行っても、見向きもせず、全く「ふてぶてしい」素振りをする。このことも総て、アマガエルの全体としての反応である。ふてぶてしいと見えるが、アマガエルの顔は、何も変化していない。このような「態度」をアマガエルが自然の状態ですることは、恐らくないであろうし、何を捕獲して食べているかも不明ではあるが、公園にいたカタツムリがキュウリを食べたことは、まずないと考えられるし、アマガエルが毎日、確実に虫を捕獲出来るかどうか分からない。しかし、餌をもらう条件の下では、このような反応になってしまうのである。これもまた、全体での反応である。

植物や動物は、人間の手が入ると、途端に自力で生き抜く力を失って行く。植物園、動物園では当然であり、植木は支柱を必要とし、世話をしないと枯れてしまう。野鳥やオランウータン（インドネシア）が密漁で捉えられ飼育された場合でも、人の手に依って、リハビリを行わないと、野生の生活には戻れない。これは、野生の生活の反応から、人間の手に依って、「楽な」反応になってしまうと、重層化の反応をしづらくなる、と考えることが可能である。野生の場合、そこで生き抜くための反応は、根が地面にしっかりと生え、雨が降らなくとも生き抜く体力（反応）であり、森の中で、常に危険にさらされながら、地力で獲物を取る、という動作（反応）である。山中に生えている山桜にはそのような反応があり、強風でも倒れず花を付け、植樹をした公園のソメイヨシノにはそのような反応がなく、強風が吹けば支柱なしには立ってられない。つまり、自然の状態では、そもそも、生き抜く反応があるものだけが、そこに生きている、ということなのである。同様に、人間が餌を与えた動物は、途端に野生の反応を失って行く。動物の家畜化というのは、人間と動物とのそのような関係である。それ故、餌付けをした動物を観察しても、その動物の自然の状態、野生の状態を知ることが、ほとんど出来ない(14)。このことは、植物でも動物でも、全く同様なのである。

さらに、反応には適正な条件がある。この点も、物質的なものの場合と、生物的なものの場合と同様である。植物や動物が生きることが出来る温度帯は限られており、どのような所でも生きることが出来る訳ではない。この点も、地球上での条件に左右されていることは確実である。そして、その条件下で、酵素やタンパク質という物質的なものが反応する。地球上には、地球の条件に合う存在するものが存在し、他の星では、その星の条件に合った存在するものが存在する。それ故、他の星の存在するものについて、地球上での推測では、恐らく間に合わないであろうことは、容易に理解出来よう。重力、大気、光線等々、地球上では想像出来ない条件が余りに多いためである。

ただし、植物も動物も、そこで生きるためにそれぞれの形態、仕組みを作って来たのではなく、単に、それぞれの条件下で、つまり地球上で生きることが出来る植物、動物が、そこに生きており、存在しているに過ぎない。赤い実を付ける木は、鳥に実を食べてもらい、種を遠く

へ運んでもらうために赤い実を付ける、というのは、本当にわくわくするような話であるが、残念ながら、木は、自分が赤い実を付けていることを「知らない」し、その実を鳥が食べることも「知らない」のである。自然の現象には、原因、目的、結果というものはなく、あるのは、そこに赤い実を付けている木がある、ということだけである。そして、その赤い実を鳥が食べ、遠くに飛んだ時に、種が地面に落ち、そこでまた、赤い実を付ける木が生える、ということだけである。鳥に食べてもらうために赤い実を付ける、というのは、自然の現象に対する人間の読み込みに依る創作である。地球上での出来事、もちろん、さらに全宇宙での出来事は、このように存在するものが存在するだけである。このことを、前節から繰り返し述べているのである。この赤い実のように、生物的なものの「説明」は、大抵の場合、人間の読み込みから生じており、原因、目的、結果の空想である。

一定の条件下での重層化の反応は、しかし、どれ程、厳密に条件を整えたとしても、完全に同じ状態で起きるとは限らない。そもそも、類似の別の反応が起きているに過ぎないのであるが、極めて類似している状態を、一般的には「同一の状態」と考えるため、「同一」と考えておく。これは、工場内で完全に機械化された食品製造でも、何らかの「失敗」が生じ、製品を回収することになる、という事例があることから明らかである。実験室ではなく、家庭内で、例えばヨーグルトを作るとしよう。そのヨーグルトには、種類によって様々な乳酸菌が数種類使われていたりするが⁽¹⁵⁾、乳酸菌の発酵温度も45℃であったり、25℃であったりである。ヨーグルトではないが、米麴の発酵であれば、60℃である。しかも、室内温度、湿度など、条件は季節に左右され、1リットルの牛乳がヨーグルトになるまでの時間も、6時間から24時間まで、様々に変化する。この出来方も、次第にヨーグルトになるのではなく、長い時間、何の変化もないまま経過し、最後の1時間で突然、固まり出す、ということが時にある。この変化が見られない数時間は、最後の1時間のために必要な時間であり、これを省くことは出来ない。それ故、いつ発酵が始まるかは、決定出来ないのである。いつの間にか始まっている、というのは、確かである。もちろん、やり過ぎれば過発酵になるが、発酵がどこで終わるのかも、決定出来ない。終わる時間を変えていると、毎回、ヨーグルトの味が異なる、ということになる。このような変化は総て、反応の重層化である。数種類のヨーグルトを長年、作り続けていれば分かることであるが、どのようにヨーグルトが出来るかは、その時々状況に合わせて、時間や保温の仕方を変える必要がある。失敗すれば、牛乳は「腐る」。しかし、腐敗も発酵も、反応としては、全く同じ出来事である。人間が食べて下痢をすると腐敗であり、おいしければ発酵である。アルコールが出来ればアルコール発酵である。世界中の発酵食品は、腐敗とカビの繁殖と紙一重で作られて来た。穀物や果物のような材料が水に触れ、温度が高ければ、腐るか、発酵かが起きる。あとは実際に食べて試すだけである⁽¹⁶⁾。食べてみなければ、味も、その結果も、知ることは出来ないからである。

これを AI 化したとしても、或る程度のもものは出来ても、失敗作は生じ、職人の手に依る製品と同じ質のものを作ることは非常に困難である。このことは、発酵に限らず、パン、そば、小豆あん、麩等々、様々な食品の製造過程でも同様である。職人は、毎日、気温、温度、天気、朝昼などの時間等々を考慮に入れながら、「勘」で、その時に最適な製品を作る。常時、小麦粉と水分量を計測しては、仕事がかどらない。しかし、機械化するためには、数値化が必要である。そして、数値化は現実から離れる、という、避けられない状況に陥るのである。

このように、生物的なものの反応は、非常に条件に拘束され、その条件下で、生きることが出来るものが生き延びて来た、と言えよう。つまり、条件に合った重層的な反応があるか、ないか、である。そこには原因や結果はない。キリンの首は、人間から見れば長いということになるが、キリンにとっては最適の長さであり、長過ぎもせず、短過ぎもしない。ゾウの鼻も同様に、ゾウにとって最適な長さである。このような生物の「不思議さ」は、当該の生物自体には何らの不思議なことはなく、単に、反応に依って生き延びて来たに過ぎない。不思議に思うのは、人間だけである。それは、パンダが「可愛い」と人間が思うことと同様である。他の動物達は、パンダを「可愛い」と「思う」ことはない。

3 人 間

次に、人間 (der Mensch) について考察する。

それぞれの人間が唯一であり、代替不可能であることは、これまでも述べて来た(17)。そして、人間だけではなく、全宇宙の総ての存在するものは、総て、唯一であり、全体的である。その中であって、改めて人間の性質を、反応という観点から捉えてみる。

人間は、動物である(18)。それ故、動物的なものが持つ性質は、人間にもあると言えよう。さらに、人間は、物質的なもので構成されている。人間のみ特別な物質は、ない。人間の身体は、地球上に存在する物質で賄われている。つまり、人間は、他の物質的なものと同様の性質を持つ。人間の身体に関する「自然科学的研究」が成立しているのも、そのことに依っている。しかし、実験室の数値通りに人間の身体が動いている訳ではない、ということは、日常的に、誰しも体験することである。このことは、人間だけではなく、動物にも物質にも妥当する。数式通りに、常に「同じように」発酵が進むとは限らない。これまでの考察は、それを繰り返して述べて来た。数字は、現実ではない。

そこで、人間が、動物的でもあり、物質的でもある、という実に当然の視点から、我々がこれまで考察して来た「反応」について考える。

総ての存在するものは、反応しつつ、変化しつつ、存在している。特に、生物的なものの場合となると、大きな飛躍があり、全体としての個体での反応に依って、「生きている」状態を

持つ。人間もまた、生物学的なものであり、つまり動物であり、全体としての反応に依って生きている。この反応は、カタツムリの全体としての反応と同様である。それ故、カタツムリの「好み」が反応に依って決定されることと同様に、人間の「好み」もまた、全体としての反応に依って決定される(19)。

しかし、人間は脳で考えるのであるから、好みも脳で決定されるだろう、という指摘が出るのは当然である。我々もまた、通常はそのように考えるし、そのようにしか考えない。ところが、乳児に離乳食を与える場合でも、既に好みが生じており、それが、どのように生じるかは、我々には、全く手掛かりがないのである(20)。快不快の感覚であっても、大人の感覚とは異なり、千差万別である。しかし、この場合もまた、乳児の体全体に依る反応の結果で好みが生じる、と考えると、脳だけではなく、全身での反応として捉えることが可能である。離乳食の柔らかさ、舌触り、温度、味そして室温などもまた、舌や口腔での接触の感触だけではなく、乳児の身体全体での反応である。特に室温は、乳児の体温を変化させ、大人のように着ぶくれした状態では食欲は落ちる。体温は、全身での感覚であり、味覚が、この全身での感覚とも深く関わっているとすると、味細胞である味蕾（旨味、酸味、塩味、甘味、苦味）と脳だけを調べていても、乳児の味覚は分からない。それ故、よほど偏屈なラーメン屋でなければ、真夏には冷房を効かせた店内で、熱いラーメンを味わうのである。

一部分だけが機能している、という視点は、全体での生物的、物質的反応を見落としている。身体感覚は、一部分だけで機能しているのではない。働いているのは脳と神経だけではない。と言うより、脳は、脳だけで働くのではなく、身体全体として脳が働いている、と言えよう。身体全体が生きていなければ、脳は働かない。反応も、全体として生じる。これが、存在するものは、全体としての存在するものであり、部分はない、ということなのである。

そこで、さらに複雑さを考慮してみよう。

味覚の好みは、「感覚」としても、かなり原初的であり、カタツムリやアマガエルを観察することでも知ることが出来る。しかし、複雑な動作、例えば、自転車に乗ることが出来るようになる、とか、泳ぐことが出来るようになる、というのは、簡単ではない。或いは、ある時、突然、外国語の会話が聞き取れるようになる、とか、外国語の文字を読むことが出来るようになる、といった例もある。1歳になった子供が、初めて話すようになる、という場合も同様である。どの場合でも、出来ない時には、出来るようになるとはとても考えられず、諦めて早々に撤退することもある。

子供が話さないと親はやきもきするが、突然、うるさい程、話し始めるまでは、その心配は消すことが出来ない。しかし、しつこく続けているか、或いは、何処からか最適な方法を知ることが出来れば、一挙に修得出来ることも、また、ある。自転車の場合、幼稚園の子供であれば、親と一緒に広場で練習し、何度か転んで泣きながら、それでも練習をすると、或る時点で、

突如、ペダルをこぐことが出来、転んだことは、すっかり忘れて走り回ることが出来るようになる。大人の場合も、ペダルなし、から始めるのが効果的であるらしい(21)。しかし、何故、突然、自転車に乗れるようになるのか、また、何故、突然、泳げるようになるのか、という問題は、全く分かっていない(22)。

このような場合、全体での反応の問題として、生物的な反応がさらに重なり合い、重層化する (Schichtung) と考えることが出来る。つまり、反応の質は全く変わらず、反応の層 (Schichten) だけが増加し、より複雑な動作を可能にする、ということである。出来るようになる要素はあるが、その積み重ねがなく、実現に至っていない状態であり、その層が積み重なる条件が整えば、突然、実現する、と考えられる。乳児の味覚に対する反応から、幼児の自転車に乗る動作、言葉が話せるようになる、という変化は、この反応の重層化によって、起きている。それ以前の出来ない時期が、それぞれ多様であり、全く予期も出来ないのは、ヨーグルトの発酵の出来具合と全く、同様である。準備期間は必要なのである。しかも、徐々に重なりが増す場合もあれば、突然、一挙に増加する場合もあり得る。突然、泳げるようになる、というのも、そのためである。これも身体全体での反応である。

外国語の文字が読めるようになる、という場合は、その文字に対して、形と音が結び付きが出来ても、すぐさま、すらすら読めるようになるのは、かなり困難である。しかし、何とか読めるようになれば、文字と音の結び付きは明白で、確実に読むことは可能である(23)。これも反応の問題である。そして、脳だけの問題ではない。つまり、まず読めるようになる、という層が全体として加わるが、容易に読むことまでは出来ず、さらに上達した時に、反応の次の層が重なり、何とか読めるようになる、という具合である。もちろん、すぐさま内容が読解出来るようになる、という段階には、まだ遠い道のりがある。つまり、反応の層がまだ足りない、ということである。子供の成長に伴う「発達」、「上達」もまた、このことと同じように生じている。

そして、読めるようになる以前では、自転車の場合と同様、このような見知らぬ文字を読めるようになる訳がない、と、嘆く一方であるが、それは、文字に対する反応が全く生じていない状態である。反応が生じていない状態では、反応が生じる状態を想像することも、「感じる」ことも出来ない。反応が生じる状態になって初めて、しかもそれはその都度の唯一の反応であるが、反応が生じる状態を知ることが可能になる。このことは、存在するものの唯一性と全体性から、明白である。全宇宙の存在するものは、同一物が反復する、ということは、あり得ない。

次に、人間の感情について考察する。

味覚、動作の反応があり、人間には、「感情」というものがある。これこそ、「人間的」なものとして、古今東西を問わず、ありとあらゆる場面で論じられて来た。この感情もまた、先ず

は、脳で「感じる」というのが、一般的である。しかし、「ハート」は心臓の形を表し、色は赤であり、ハートは胸にある。「ハートが熱い」と言って頭を指す人は、まずめったにいないであろう。心は、胸にあるからである。

この感情もまた、我々の視点から言えば、全体としての反応である。しかも重層的である。複雑な「感情」は、多層の反応に依っている。それ故、複雑な感情は、幼児には理解出来ない。そのような重層的な反応がないためである。成長するにつれて、複雑な動作が出来、複雑な感情を理解出来るようになるのは、この重層的な反応が生じるからである。しかも、これもまた、全体的に反応する。心が胸にあり、心が痛めば頭痛が起き、お腹も痛くなる、というのは、そのような全体的な反応が生じているからである。人間の「感情」は、このように身体全体での反応であり、脳の働きだけではない。繰り返して言えば、脳は、脳だけでは働かない。身体全体が反応して初めて、脳もまた、その機能を発揮する。このことは、人間の身体内の臓器総てに妥当する。

改めて確認しておくが、感情は人間が作り出した概念であり、動物には感情はない。死の恐怖は、死ということを知らなければ「感じる」ことは出来ない。動物は、死ぬことを「知らず」、さらに自分が生きていることも「知らない」。それ故、幼児には死の恐怖が理解出来ないのである。幼児には、理解するための反応がない。しかし、丁寧に説明し、分からせる（反応）ことは可能である。幼児もまた、当然のことながら、人間だからである。動物にはそれは不可能である。生きていること、死ぬことを知っているのは、人間だけである。イヌの気持ちとかネコの気持ちとか言う場合があるが、ペットとしてのイヌやネコは、家族の一員であり、当然、嬉しがったり、悲しんだりするように見える。家族だからである。しかし、これも、残念ながら、人間の単なる読み込みに過ぎず、イヌにもネコにも気持ちや感情はない。アマガエルのふてぶてしさと同様である。イヌもネコも、そのような概念を作り出すことが出来ない。概念を作るためには、人間が持つ反応の重層化が必要であり、それは考える力であり、動物には出来ないことなのである。どれ程、動物を訓練したとしても、決して、考える力を獲得することはない。知能が高い動物、というのは、映画の中で、おしゃべりをする動物のことでしかない。これは、反応の層、考える力の問題なのである。それ故、人間の登場以前の地球上では、如何なる動物も、感情を持つことはあり得なかったのである。

もちろん、人間もまた、動物であるため、700万年か600万年前に木から草原に降りて来た時から、一挙に、このような考える力の反応を身に付けた、とは考えにくい。二足歩行をし始めた当初は、やはり、非常に動物的であったと推測される。この場合もまた、長い準備時間をかけて、次第に備った反応であろう。或いは、最後に一挙に獲得したかも知れない。しかし、その過程も、また、何故、人間だけにこのような反応が生じたのか、という問題も、不明なままである。よほど確かな証拠となるものが発見されるか、人間の骨が順次、発掘されるか、運

良く、そのようなことが起きない限り、我々には何も分からない。恐らく、言語の成立以前から、感情的なものは生じていたのではないか、という憶測が出来る程度である。いずれにせよ、動物に感情はなく、動物を「人間的」に考察することは、単に人間の読み込みからの創作に過ぎない。

そして、ここで、人間の考える力（Denkenskraft）について論じる²⁴。

この考える力は、人間が獲得した重層化の反応である²⁵。この層の厚み（もちろん比喩的ではあるが）が、考える力を生じさせる。これもまた、全体的な反応であり、脳だけの働きではない。「考える」ということは、全身での反応である。それ故、脳のニューロンを取り出しても、脳の働きが分からないのは、当然である。部分的なものからは、全体的な反応を知ることは出来ない²⁶。臨床試験によるプラセボ、ノセボ効果は、この全体の反応から生じる、と考えられよう。「頭」で理解したことは、身体「全体」で反応し、偽薬が効いたり、副作用が出たりする。それは、自然科学的な「客観性」からは、理解出来ないことであり、心理的效果などの説明はあっても、現実の現象に対して、何も語ってはいない。

「痛み」の本質についても、我々は、ほとんど何も分かっていないが、腰痛がストレスから来るもの、とか、実際には機能障害があり痛みがあるはずであるのに、気が付かずに痛まない、とか、「心理的」なもので話を終わらせているのが現状である。紙で指を切った場合や、スポーツの練習で指を骨折した場合なども、始めは痛みを感じない時がある。書類を急いで整理する作業の途中、時間に追われながら、きれいにそろえる必要がある書類に、血が付いていることに気が付く。よく見ると、人差し指に切り傷がある。そこから血が流れ、書類に血が付いた。ということに、気が付いて初めて、切り傷の痛みを感じる。それまでは作業に必死であり、気が付かなければ、痛みも生じない。指の骨折の場合も、突き指程度とと思っている間は、痛みはひどくはない。なかなか痛みが引かないため、数日後、病院へ行き、レントゲン撮影で、骨折が判明する。それが分かると、突然、「骨折」の激痛が走る。状態は初めから骨折であるが、突き指と骨折では、痛みが「違う」（と考えている）からである。このことも、痛みが、単に神経系統だけで働いているのではない、ということを示している。

そもそも、「心理的」なものについて、心理学でも、根本的には、ほとんど何も分かっていない。しかし、我々の視点からすれば、心理的なものも総て、概念であり、人間の反応に依る創作である。神経過敏症の人が、歯科医で治療を受ける際、口を開けるだけで吐き気がし、治療がうまく出来ない場合があるでしょう。歯科医が、「とてもいい笑気ガス（麻酔）が入ったので、これを使えば大丈夫です。ミントの香りがします。」と説明し、ガスを使って治療をする。笑気ガスを吸ったから、安心して、この患者は、これまでの吐き気は全く出ず、最後まで治療を受ける。その笑気ガスは、ガスが出ておらず、ミントの香りを付けた、ただの空気であったが、絶大な効果を発揮する。歯科医も患者も気が付かない。「いい笑気ガス」だからである。

このように、吐き気や恐怖心も、人間が反応に依って作り出す。心理的なものや感情は、作り出さなければ、何処にもない。植物や動物も考え、感情がある、と考えるのは、ひたすら楽しい空想の世界での話である。それ自体には、何の問題もない。ビニールハウスの作物にモーツァルトを聞かせ、家族同様のペットと会話をするのは、世話をする人間本人が「心底」楽しんでいるから、効果があり、良いのである。

感情が創作であれば、当然のことながら、心も魂も、創作である。そのような「精神的なもの」は、人間の重層的な反応に依って、作り出されたものである。それ故、ハートは胸にあるのであり、頭にあるのではない。脳で考えながら、心は胸にある、と勝手に決めているからである。魂の不死もまた、人間の「永遠の」人生への願望の表現でもある⁽²⁷⁾。これもまた、単なる夢の話である。

このようなものも総て、人間の考える力、つまり重層的な反応から生じている。人間は、ひたすら、生き抜くために必要なものを作り出し、創作の世界を拡大し、それに依って生き抜いて来た。そして、人間が作り出したものに不必要なものは何もなく、如何なるものも、人間が生き抜くために必要不可欠であった⁽²⁸⁾。感情や心もそのようなものであり、夢の話である不死も、人間は、自分にとって必要としたのである。

この観点から、宗教的なものへの理解が得られる。つまり、人間の力や理解を超えた宗教的なものへの畏怖もまた、人間にとっては、生き抜くために必要不可欠なものであった。それは現在も変わらない。神は死なないから、神なのである。人間は、まさにありとあらゆる形態の神的なものを作り出し、宗教的な世界を創作し、そのことに依って、人間の力だけでは生き抜くことが出来ないような厳しい状況でも、何が何でも生き抜こうとして来たのである。今、置かれた自分達は、何らかの神的なもののおかげでもあるし、神的なもののおかげでもある。そのように人間は、生き抜く条件を自分で作り出し、その条件下でのさらなる反応に依って、生き抜く気力を生み出して来た。これが全体的、重層的な反応である。

宗教的なものは、人間が自ら作り出した反応の環境でもある。この環境は、自然の条件とは異なり、それぞれの置かれた状態に応じて、それぞれが、地域や時代に応じて、最も適合し易いような内容の宗教的なものを作り出して行ったのである。宗教的なものは、人間が作り出さなければ、自然の現象には、何処にも見出すことは出来ない。感情と同様である。自然界には、そのようなものはない。多神教的なもの、一神教的なもの、神の概念を持たないもの等々、それぞれの環境に応じて、様々な宗教的形態を、自ら作り出し、重層的な反応を自ら促していったのである。いずれにしても、宗教的なものの形成は、人間が生き抜くためには必要不可欠であり、これにしがみついて、人間は生きて来た、つまり、反応し続けて来たのである。

当然のことながら、様々な宗教的なものの、どれにおいても、或る一つだけが正当性を持つ、という理由はあり得ず、どれもが結局は根拠もなく、正当性もなく、同じような宗教的なもの、

程度でしかあり得ない。「正当性」は、自分達にとっての「必要性」の言い換えである。それ故、それぞれ自分達だけが、「正しい」ことになる。この点は、無根拠性（Grundlosigkeit）として指摘した(29)。この「事実」を、先ずははっきりと確認する必要がある。そうでなければ、他の宗教との対立や、同じ宗教でも宗派の対立などの、実に無意味な、無駄な争いを避けることは困難である。このような争いも、自分達の反応のみを残す、つまり、自分達だけが生き抜こうとする、愚かな願望である。

そのような状況は、宗教的なものを求めた、根本的な反応からは、程遠いものである。どの宗教でも、特定の民族宗教は別として、始めは、世界中の誰もが救われ、誰もが幸福になれることを目指したはずであるが、教団が形成され、規模が大きくなり、財産が作られると、とたんに宗派と争いが生じる。それは、そもそもの考え方からはかけ離れたものである。このように、人間が考えること、つまり反応は、置かれた状況に依って左右され、生き抜くだけの反応から、ひたすら楽な反応の条件を作り出す、という、全く「人間的」な世界へと突入する。そして、人間は「悪」というものを生み出すのである。これは、単層的な反応しかないような自然の状態では、見い出せないものなのである。

さらに、思想的なものについても、全く同様に考えることが可能である。

日本の縄文文化や世界各地の都市が1万5千年前から1万年前頃に形成され、人間が、大き過ぎる集団で生活出来るようになる(30)。これも最終氷河期が終わり、気候の変動と農業の開始と関わっていることは、恐らく確かであろう。気温が上昇しないと、植物は育たない。地球の表面温度は、ある程度、高くないと、地表で生物は繁殖出来ない。そして、地球の状態は、45億年の間、「同じ」状態であったことはない(31)。常に変動を続け、「一定」の環境というものは、あり得ないのである。このことは、存在するものが唯一であることから、余りに明白なことである。そして、我々は、たまたま、現在の状態の地球上に住んでいるに過ぎない。

そこで、生きることに余裕が生じて初めて、哲学的な思想が生み出される。これもまた、当然のことながら、考える力という重層的反応である。生き抜くことだけに精一杯である場合には、このような余裕の産物は生じない。生きることで、既に反応の余裕はなくなっているからである。しかし、食料もあり、寝る所もあり、猛獣に襲われる恐怖もない、という場合には、生き抜くだけの反応以上の反応が可能となる。重層化の余裕である。つまり、「考える」という作業は、生きる反応以上の状態において生じ、生きるだけの反応では困難である。

それ故、人生についての「悩み」は、悩む余裕がある場合に生じ、悩む余裕がなければ、悩むことも出来ない。悩みは、余裕が作り出す。これも人間の反応なのである。生き抜くことだけに精一杯な生き方をしている者は、人生が苦であるかどうか、悩む間もなく、働く必要がある。今日の食べ物、今夜の寝る場所すら、とりあえず確保しなければならないからである。このことは、2500年前の古代ギリシャ、古代インドや古代中国でもそうであるし、現代社会でも、

全く同様に妥当する。ストリート・チルドレンは、住む家もなく、さぼる学校もない。引きこもりや不登校になりたくても、なりようがない。生きることの反応だけで、反応を使い果たしてしまう。それ以上考える余裕の反応は残っていない。これもまた、重層的な反応が条件によって左右されるということなのである。生活に余裕があるからこそ、悩むことが出来る。つまり、悩みを作り出すことが出来る。

哲学は、論理性と理性的であることが重要である。特に「西洋」哲学は、そうである。アリストテレス以来、論理は「正しい」思考方法の指標であり、矛盾は許されない。しかし、我々のこれまでの考察では、かなり視点がずれて行く。我々の論述も、当然ながら、「論理的」でなければ、全く無意味な表現になる。しかし、自己矛盾自体が、そもそも人間の概念に依る創作であり⁽³²⁾、論理自体もまた、現実とは、ずれるものであった⁽³³⁾。つまり、論理も理性もまた、人間が作り出した創作に過ぎず、自然界にそのままそれ自体が存在するものではないのである。このことは、宗教的なものや感情と、同様である。

数字が現実を表し切れないことと同様に、論理と理性だけでは、現実を捉えることは困難である。論理と理性を用いて、「正当性」や「客観性」を主張しようとしても、その主張は、論理と理性に依って歪められた現実だからである。現実の世界には、ルールも法則もなく、何らの予測もあり得ず、ただ唯一で全体的な存在するものがあるだけなのである。それに直面し、人間は、ただひたすら、重層的な反応をし、生き抜く反応をしているに過ぎない。数字と同様、論理や理性は、現実を切り取ってしまう。そのため、存在するもの総てをそのまま取り上げることが出来ない。唯一で全体的な存在するものを、都合の良いように切り刻むのである。人間についてすら、地球上の総ての人間を考察出来ず、現在に至るまで、「理性的な人間」だけが人間であるかのような考え方を消し去ることが出来ないことも、そのためである。神は神であり、理想は理想である。現実の人間は、平凡な日常に生きており、それ以外には、人間の姿はない。普通に生きることは、普通に反応し続けることである。

古代から現代に至るまで、世界中での女性蔑視、男性中心の考え方は、男性の女性に対する劣等感から生じたと、実に勝手な解釈も可能である。つまり、男性には、生まれた子供が自分の子供であるかどうか、決して分からない。女性にとっては、自分が産んだ子供は、自分の子供であることは確実である。この劣等感は小さくない。そして、その劣等感の解消のために男性中心を作り出す。

事実、現代に至るまで、男性中心で、物事は考えられている。封建制度では、それは当然のことであり、現代社会においてすら、セクシャル・ハラスメントという愚かな行為が世界中で問題になっている、という事実に対して、フェミニズムの論者だけではなく、哲学、思想そのものが、根本的に取り組んでいるかどうかは、疑わしい。何故なら、人間を本当に捉えているかどうか、その点からして怪しいからである⁽³⁴⁾。人間の平等や男女平等という夢の話は、実現

して、当たり前のように勘違いされがちであるが、現実とはそれとは程遠く、そもそもの「人間観」自体、プラトンやアリストテレスを模範にするのは、古代ギリシャに生きるのであれば、それで良いが、現代の我々の考察とは全く別のものである。奴隷や召使いは、主人とは同列にはならない。

結局のところ、感情も論理も、人間が作った概念であり、根本的には同じものである。異なるのは、当てはめようとする内容だけであり、その内容もまた、人間が作り出したものに過ぎない。いずれも、人間の重層的な反応に依って作り出され、人間は、自分が作り出したものに依って、さらに条件付けられている。「精神的なもの」と「肉体的なもの」の関係は、そのような条件付けから生じている、と言えよう。両者共、相互に反応し、それも全体的に反応する。このような関係を、数値的に捉え、客観的に説明しようとする、と「精神」と「肉体」の分離を考え、ストレスなどの「原因」を作り出し、人間を「病気」にしてしまうのである。数値をわずかでもずらせば、何らかの検査結果に依って、その範囲の該当者が急増し、該当者は「異常値」で「病気」になる。これが数字に依る現実の「切り取り」である。しかも、その数値は、世界中の研究成果に従って更新され、常時、同じ値ということがない。

末期がんを持つ患者が、「元気ですか」と友人に尋ねられ、「元気ですよ、ご飯もおいしく食べるし、風邪もひいてないし」と答えるような場合、このご本人は、本当に「元気」であり、「健康」でもある。そのような反応が本人に生じており、実際に、毎日、生きて行く反応で元気なのである。そのように元気な人間を病人扱いにすべきではない。しかし、現実には、様々な領域において、このような「操作」が行われ、多くの「患者」を作り出しているのである。

以上、様々な観点から、反応について考察して来た。物質的なものから、生物的なもの、人間に至るまで、同じ反応に着目することにより、我々は、理解出来る範囲をさらに広め、従来の混乱の一部にせよ、整理出来たのではなからうか。これに依り、人間についての余りに当然の理解へと向かっている、とも考えられる。

分かる、は、「分ける」と言ったりするが、実は、分けては「分からない」(35)。特に、単細胞生物を、生きたそのままの状態をどのように理解するのか、これこそ、分けては分からないことであり、物質と生物の飛躍を考えるためにも、全体として、新たな生物「理解」が得られることを期待したい。それは、「自然科学的」な研究の課題である。そこでは、実験に依って、「客観的」な数値が示されるはずである。

単細胞生物のことが分からなければ、人間のことは、なおさら分からない。脳だけではなく、脳と共に、身体全体で考える、という、謂わば、とんでもない発想の「考える力」に依って、自然の現象そのままを、我々が何処まで理解出来るのか、どのように理解出来るのか、という問題は、相変わらず、我々の眼前にある。我々は、とりあえず「知識の解放」を示したに過ぎ

ない。そして、全く新たな探求は、ここから、もたつきながら既に「始まって」いる。

注

- 1 拙論「唯一性に関する再考察」9ページ参照。
- 2 この発端が「デカルトの呪縛」からの解放であった、ということは、確認しておいて良い。
- 3 拙論「全体性・時間・空間」3ページ参照。
- 4 拙論「唯一性に関する再考察」2ページ参照。
- 5 地球の環境変化に関しては、三村芳和『酸素のはなし』参照。
- 6 拙論「全体性・時間・空間」6-8ページ参照。
- 7 拙論「全体性・時間・空間」10-12ページ参照。
- 8 拙論「全体性・時間・空間」14ページ参照。暗黒物質については、余りに不明な点が多いため、ここでは検討対象とはなっていない。
- 9 拙論「全体性・時間・空間」12ページ参照。
- 10 拙論「全体性・時間・空間」5-6ページ参照。
- 11 拙論「全体性・時間・空間」8ページ参照。Sandkühler, Hans : Europäische Enzyklopädie zu Philosophie und Wissenschaften, Bd. 4, Tier - Mensch - Übergangsfeld, S. 594-597, Bd. 3, Mensch, S. 336-358, Menschenbild, 358-366参照。
- 12 ここで単純反応とか、複雑反応とかの用語を用いると、我々の視点からずれている。反応の質の違いはなく、同じことが起きている。
- 13 動物の餌の好みは、神経系統を調べても、何も分からないことは、恐らくこのことに依っている。しかも、動物の好みを「自由意志」がある、と考えることは、やはり、ためらう場合が多いのではないか。
- 14 動物に対して、人間は、実に様々な読み込みをしており、それ自体は、非常に楽しいものであるが、そのような読み込みは、動物自体とは、全く関係がない。アマガエルの「ふてぶてしさ」もそれである。
- 15 各ヨーグルトの種菌の説明書に、ラクトコッカス・ラクチス、ビフィズスバクテリウム・ビフィダム等々の記載がある。
- 16 発酵については、各国の各食品についての実用書から、発酵食品学等々、膨大な資料が得られるが、簡便なものとして、小泉武夫『発酵』参照。
- 17 拙論「知識の解放 序論」45-46ページ、「唯一性に関する再考察」2-3ページ参照。Mittelstrauß, Bd. 2, Leben 549-552.
- 18 これを認めない見解も、もちろんある。Sandkühler, Bd 3, Mensch, S. 336-358, Menschenbild, S. 358-366. さらに、檜垣立哉「動物と人間のあいだ 哲学的視点から」、渡辺正峰『脳

- の意識 機械の意識』参照。Glattfelder, James B. : Information - Consciousness - Reality. 後半部分、参照。
- 19 嗜好については、以下を参照。青木宏「食品の嗜好」
 - 20 乳児の好みについては、ベビカム株式会社「「離乳食」についてのリサーチ」参照。Sandkühler, Hans : Europäische Enzyklopädie zu Philosophie und Wissenschaften, Bd. 2, Ganze/Teil, S.219-231. 参照。
 - 21 とりあえずインターネットからの記事。多数あり。
 - 22 バイオメカニクスや心理学においても、明確な解説は見当たらない。
 - 23 山田佳代子「文字認知の発達についての一考察」、正高信男『子どもはことばをからだで覚える』参照。
 - 24 拙論「知識の解放 序論」51ページ参照。
 - 25 ただし、生物の「進化」からすると、そこには「変化」があるだけで、「進化」というものはなく、コアセルベートやアメーバからすれば、順次、単細胞、多細胞へと遺伝子のコピーの失敗が続き、その失敗のなれの果てが人間である、とも言えよう。
 - 26 拙論「全体性・時間・空間」7-8ページ参照。
 - 27 拙論「知識の解放 序論」50ページ参照。
 - 28 拙論「唯一性に関する再考察」5ページ参照。
 - 29 拙論「全体性・時間・空間」4-5ページ参照。
 - 30 この時期に武器を使った戦争の開始については、山際寿一『暴力はどこからきたか』196ページ。
 - 31 三村芳和『酸素のはなし』参照。
 - 32 拙論「唯一性に関する再考察」9ページ参照。
 - 33 拙論「全体性・時間・空間」3ページ参照。
 - 34 ジェンダー論も膨大な資料があるが、例えば、稲垣恵一「ジェンダー論的カント解釈の一試論」参照。
 - 35 この「分かる」を各国語での表現と意味を分解すると、非常に興味深い考察になるが、かなりの分量になるため、別の機会にしておく。

参考文献

青木宏「食品の嗜好」Nippon Shokuhin Kogyo Gakkaishi Vol. 41, No. 1, 77-83 (1994)

稲垣恵一「ジェンダー論的カント解釈の一試論」

file:///C:/Users/Toua%20Uni/Downloads/nagpj_8_43%20(1).pdf

小泉武夫『発酵』中央公論新社、1989年

林隆也「知識の解放 序論」、朝日大学教職課程センター研究報告書 第20号、2018年、45-52ページ

林隆也「唯一性に関する再考察」、朝日大学一般教育紀要 No44、2019年、1-10ページ

林隆也「全体性・時間・空間」、朝日大学一般教育紀要 No45、2020年、1-18ページ

檜垣立哉「動物と人間のあいだ 哲学的視点から」、生産と技術、第66巻、第3号 (2014)

<http://seisan.server-shared.com/663/663-115.pdf>

ベビカム株式会社「「離乳食」についてのリサーチ」2017年

<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000096.000007518.html>

正高信男『子どもはことばをからだで覚える』中央公論新社、2001年

三村芳和『酸素のはなし』中央公論新社、2007年

山田佳代子「文字認知の発達についての一考察」芸術と教育、第3号

<https://www.osaka-geidai.ac.jp/files/yamada.pdf>

山際寿一『暴力はどこからきたか』NHK 出版、2007年

渡辺正峰『脳の意識 機械の意識』中央公論新社、2017年

Aristoteles : Philosophische Schriften, 1 - 6 Bd. Hamburg/Meiner, 1995

Capelle, Wilhelm : Die Vorsokratiker, Stuttgart/Kröner, 1968

Descartes : Œuvres et Lettres, Gallimard, 1953, 1999

Glattfelder, James B. : Information - Consciousness - Reality, Kindle, 2019

Heidegger, Martin : Sein und Zeit, Tübingen/Max Niemeyer, 1979

Mittelstraß, Jürgen (Hrsg.) : Enzyklopädie Philosophie und Wissenschaftstheorie, Bd. 2, Stuttgart/Weimar/J. B. Metzler, 1996

Sandkühler, Hans (Hrsg.) : Europäische Enzyklopädie zu Philosophie und Wissenschaften, Bd. 3, Bd. 4, Hamburg/Meiner, 1990

Wittgenstein, Ludwig : Tractatus logico-philosophicus, Philosophische Untersuchungen, (Werkausgabe Bd., I), Frankfurt a. M./Suhrkamp, 1984